第５８回ＮＳＲＩ都市・環境フォーラム

（no.298）

『ソウル：アジアの僻地から世界クラスの都市へ』

李　　仁　根　氏

ソウル市立大学　客員教授

日時　２０１２年１１月１４日（水）

場所　ＮＳＲＩホール

ソウルは１４世紀末に朝鮮半島の中心になったものの、近代都市として発展したのは1960年～1990年になってからです。この間に、人口は4倍になり国民１人当たりの収入は　80倍に増加しました。基本的な都市インフラについてもこの間に整備されました。都市の驚くべき産業化はしばしば 「漢江の奇跡」と呼ばれ、そしてこれは韓国人にとっての誇りの源になっています。しかしながらこの急速な発展は環境とサスティナビリティに犠牲をもたらしました。都市戦略は 1990 年中頃以来、開発から保全および復元へと変更されてきました。またソウルは水路を整備するためのグリーンテクノロジーの使用、環境に優しいエネルギー使用の促進、エネルギー効率促進によってグリーンテクノロジーのパイオニアになりました。ソウルは文化、商業および研究開発において洗練されたハブに変わり、森記念財団によって行われた最新のグローバル・パワー・シティ・インデックス（世界の都市総合力ランキング）において6位にランクされました。

ソウルの都市の発展を年代順に、そして急激な都市化がもたらした副作用について話をし、そして、世界クラスの都市であるための挑戦について議論をしたいと思います。

◆李　仁根（In Keun LEE）氏
ソウル市立大学　土木工学科　客員教授

1979 年　ソウル大学の土木工学科卒業（工学士）　卒業後、ソウル市に入庁。ソウル市政での32 年間、首都インフラ関連のプロジェクトを担当する様々な部署で公共事業に従事。主要な職歴はソウル市地下鉄建設本部設計管理部長 、ソウル市建設企画局長 、ソウル市都市計画局長 、清渓川（Cheong Gye Cheon）復元工事団長、ソウル市都市基盤施設本部本部長、ソウル市都市安全本部本部長（～2011 年末）。

その後は公職から身を退き、2012 年 2 月～ソウル市立大学校の客員教授。1985 年に海外研究政府給付金を得て、ロンドンの市立大学でエンジニアリサーチを研究し、1991 年に PhD を取得。英国土木学会の fellow および韓国の韓国工学翰林院メンバー。

『ソウル：アジアの僻地から世界クラスの都市へ』

谷　ただいまから第５８回ＮＳＲＩ都市・環境フォーラムを開催させていただきます。

本日は、お忙しいところお越しくださいまして、まことにありがとうございます。

本日のご案内役は、私、広報室の谷礼子でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本日のフォーラムは、ご案内のとおり、ソウル市立大学の客員教授でいらっしゃる李仁根（リ・イングン）先生にお話をいただきます。本日は、『ソウル：アジアの僻地から世界クラスの都市へ』と題してご講演をいただきます。

李先生は、１９７９年にソウル大学をご卒業され、その後ソウル市にご入庁されました。そして、そちらでソウル市の地下鉄計画、清渓川の復元事業など数多くの都市計画事業に携わっていらっしゃいました。その後数々のご重職を経て、２０１２年、ことしの２月から現職についていらっしゃいます。

本日は、先生が携わられた事業も含めてソウルの発展について、いろいろ貴重なお話が伺えるものと大変楽しみにしております。

本日の講演は、先生の韓国語になりますが、翻訳につきましては、私どものソウル支店長の李芝海（イ・ジヘ）が担当させていただきます。よろしくお願いいたします。

それでは早速、先生に講演をいただきたいと存じます。皆様大きな拍手で先生をお迎えください。（拍手）

李　親切な紹介ありがとうございます。お会いできてとてもうれしいです。以前、２００８年の１１月に日建設計の依頼で、清渓川の開発について講義をしたことがありました。

去年ソウル市を退職しまして、今はソウル市立大学で講義をしております。今年の２月に日建設計の安副社長から、またこのような講演会にご招待いただきまして、ここに立つことになりました。

今日、私はソウルについての話をしようとしています。

私は、東京というのは先進都市として、また永遠の学びの場として考えております。高

架道路を含め、建物とかいろんなことを東京で学びました。東京で成功した政策はソウルでも成功しました。今まで私にとって東京というのは超えられない山だったと言えると思います。

（図 1）

皆さんにとってソウルはどんな都市でしょうか。皆さんにとってソウルのイメージは開発途上国の首都として、乱開発かつ過密な都市という認識があると思います。また、ソウルに一度でも来られたことのある方は、活力のある都市、発展している都市というイメージがあると思います。

（図 2）

このスライドは６０年前のソウルの様子です。１９５０年から５３年までの間、韓国には戦争があって、ソウルの都心部はこのように破壊されました。

（図 3）

６０年過ぎた最近のソウルの様子です。美しい川と美しい山がある都市になっております。

（図 4）

森記念財団から、世界の都市の総合力をランキングが出ていますが、２００８年にソウルは世界で６番目の都市になりました。これは７０項目の項目を評価して順位を決めるらしいのですが、去年の１０月に評価したもので６位になっております。

（図 5）

私は、戦争の傷を背負ったまま、今の都市に発展していったソウルのことについて説明したいと思います。

今日は、ソウルの発展過程を紹介して、その後、最近のソウルの変化のトレンドについて、また、都市基本計画について、そのためのソウルのいろいろなプロジェクトについて紹介したいと思います。

（図 6）

ソウルの発展過程です。ソウルというのは韓国の中でも特別な都市だと思います。ソウルの面積は韓国全体の０．６％にすぎないんですが、その人口は韓国人口の２０％を占めています。また、ソウルで働く首都圏の方たちも入れると、全体の５０％になります。

（図 7）

ソウルは朝鮮半島の中央部にあり、昔からの戦略的な要衝地でありました。先史時代から人間が暮らしていて、ソウルの東側に行くと、その住居地が発見されております。ＢＣ１８年から４７５年まで百済の首都でありました。１３９４年から朝鮮の首都として位置づけられました。

（図 8）

朝鮮時代の首都であるソウルは、漢陽という名前でした。交通の便がよく、また、船を通じて全国どこまでも行ける都市でした。朝鮮の建国の時には風水に基づいて土地を選定しました。今のソウルの旧都心は、内側に４つの山があり、外側に４つの山があるという構成になっています。前には水があり、後ろには山があります。

（図 9）

その当時のソウルの様子は風水に基づいた構成でした。正宮殿の真ん中に景福宮という正殿がありました。東側には宗廟という歴代の王様たちをまつっているところがありました。西側には神に祈りができる場所がありました。このような首都の様子は東洋で普通に見られる構成です。内側にある山４つを結ぶ城郭がつくられました。東西側に４キロ、北と南では５～６キロぐらいの距離を持っております。その当時の人口は１０万人で、朝鮮後期になりますと２０万人まで増えてきました。その当時の建設の様子をシミュレーションでご紹介したいと思います。

（図 10）

東西方向に大きな道路、今、鐘路（ジョンロ）と呼ぶ道路ができました。南大門まで行く道が形成されました。

（図 11）

朝鮮時代が終わって、韓国は日本の植民地になりました。漢陽と呼ばれたソウルはその時代から京城と呼ばれることになりました。その頃都市の構造が変化しました。道路が建設され、鉄道と電車が導入され、伝統と歴史が毀損されました。最初の都市計画法令が制定されることになり、法律に基づいて、京城市街地計画がつくられました。目標は１９６５年まで計画人口１１０万人を集めるというものでした。人口は２０万人から開放される直前には９０万人まで増えてきました。

（図 12）

その当時の京城の様子です。先ほどお見せした景福宮という正宮殿の前に朝鮮総督府が

つくられました。４つの山のうち南側にある南山という山に神宮をつくりました。

（図 13）

南山にあった朝鮮神宮の様子です。左側のほうが昔の朝鮮神宮の様子で、同じ場所で撮った最近の写真が右側になります。

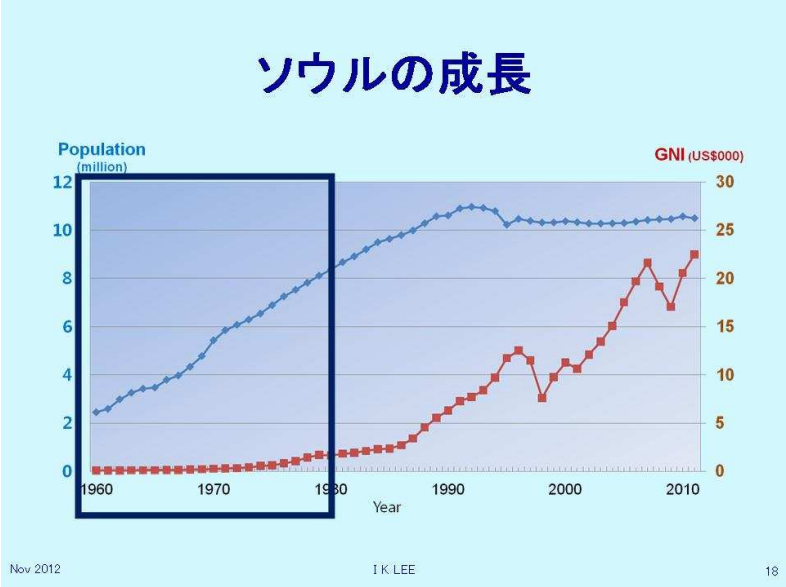
（図 14）

独立は１９４５年でした。独立してすぐ韓国戦争がありました。ほとんどの都市が破壊されました。戦争の前に１４０万人もいた人口は６５万人に減ってしまいました。１９５３年に休戦になり、多くの人口はまたソウルに戻ってきました。その後、戦後復旧事業が続くようになりました。そのころから農村の人口が持続的に流入しまして、１９６０年には２４０万人になりました。

（図 15）

このグラフはソウルの成長過程をお見せしています。青い線はソウルの人口の変化です。１９６０年に２００万人だった都市が１９９０年代に入ってからは１０００万人を超える都市になりました。赤い線のほうは１人当たりの所得を見ています。１９６０年代に１人当たりの収入は６０ドルにもなっていませんでした。

（図 16）



今までのこの６０年間の歴史を３つに分けて説明したいと思います。このように分けた理由は１９６０年代から本格的な近代化の道を歩いたということです。１９６０年というのは韓国に軍事革命がありまして、朴正熙大統領が権力をとった時期であります。

（図 17）

そのころは国家経済開発計画を樹立して実行していた時期です。基幹産業を拡充して、輸出を拡大し、ＳＯＣ建設を活発にやりました。そのころの国の目標は飢餓の人口を減ら

すということです。ソウルが爆発的に拡張していった時期でもあります。ソウルの人口は６００万人に増えました。毎年２０万人から３０万人が増えてきたということです。私は、この時期を前期開発時代と言いたいと思います。

（図 18）

このころ重点的にソウルで推進した事項について説明したいと思います。このように拡大していく都市の規模に合わせて必要なインフラを供給するというのが最大の努力点でした。道路、橋、地下鉄、上下水道などを建設し、土地の区画整理事業が実行された時期です。汝矣島（ヨイド）を開発し、江南（ガンナム）の開発に取りかかる時期でした。

また、都市計画に関連する法令が整備される時期でした。国土計画法、都市計画法、建築法が体系的に整備されました。また、現代的な都市をつくるために都市基本計画が樹立されました。このころの特別の規制をいいますと、開発制限区域をつくる、グリーンベルトをつくるということです。ソウルが拡張し続けても守らなければいけないと考えられたのは、４キロのグリーンベルトゾーンをつくることでした。

（図 19）

そのころの幾つかの写真をお見せしたいと思います。この写真は、ソウル中心部から金浦空港に行く道を整備する写真です。このように人力で道路をつくっています。

（図 20）

市内のいろんなところで道路を建設する様子です。

（図 21）

ソウルの中心部のど真ん中にある光化門交差点は地下歩道がつくられました。この白く見えるのは地下歩道に入るキャノピーです。この時代のソウルには５万台ぐらいの車がありました。

（図 22）

清渓川がふたをされることになりました。

（図 23）

また、３１高架道路がつくられました。

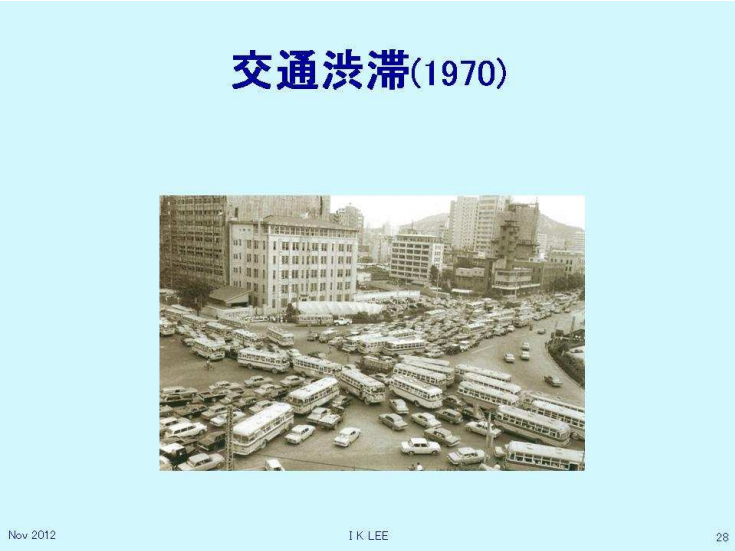
（図 24）

それが清渓川の上にある清渓高架道路とつながるようになりました。

（図 25）

一言で言うと、ソウル市内はすべてが工事中と言えると思います。

（図 26）



そのころ、ソウルの交通の渋滞は激しくなりました。１９７０年には７万台しか車がなかったけれども、その中心部の交差点はこのような様子になっていました。

（図 27）

この写真はバスの終点でバスを待っている市民の様子です。これは今韓国の繁華街になっている江南地域の写真です。

（図 28）

このような渋滞を改善するために１９７１年から地下鉄の建設に着手しました。

（図 29）

ソウル市内には現代的な様子の新しい建物のセウン商店街がつくられました。

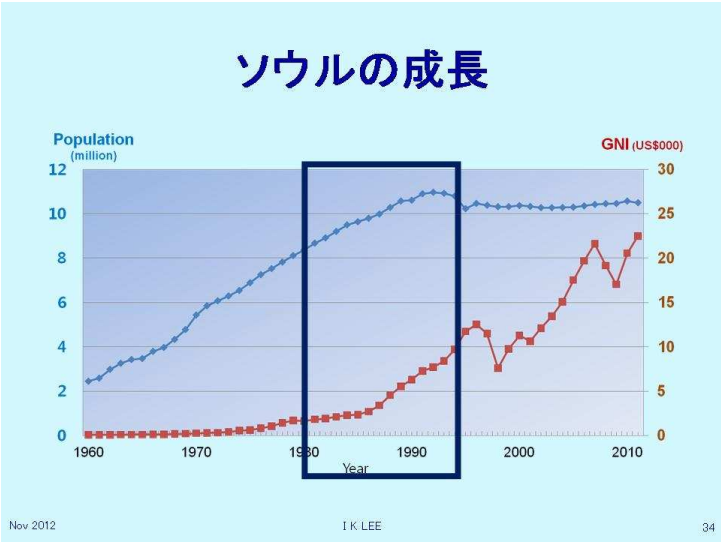
（図 30）

江南のほうでは、大団地のマンションがつくられるようになりました。

（図 31）

その当時のソウル市内の様子です。東京とすごく似ていると思います。

（図 32）



その後の１９８０年代からのソウルの成長をお見せしたいと思います。１９８０年から１９９５年までのことです。このころは韓国では軍事政権が政権をとっていた時期です。その後になって民間の大統領が生まれました。また、この時代には経済の成長が目に見える時期でもありました。

（図 33）

私は、この時期を後期開発時代と呼んでいます。ソウルはこの時代に持続的に拡張しました。人口が１０００万人を超え、車の台数がかなりのスピードで増えました。所得水準が１万ドルを超えてから、２１万台あった車が２０４万台まで増えました。ソウルの中におさまりきらない人口はソウルの周辺に新都市を建設して、そこに分散されるようになりました。そのころ首都圏に集中される人口を恐れる声が出始めました。

（図 34）

その時代に重点的に推進した事項について説明したいと思います。このころソウルではアジア大会とオリンピックが開催されました。この２つのイベントを成功させるためにいろいろなインフラの建設がありました。地下鉄が続けて建設されるようになり、漢江の開発、下水処理場などの建設がありました。新都心がつくらました。新規宅地に関しては公営開発をメインにしています。この開発利益を私有化するのではなくて、国が公有化するということを図った時期でもあります。このころ江南の開発が終わり、川の北側は沈滞することになりました。

そのころの主な制度整備を説明しますと、都市設計制度の導入があります。都市基本計画は２回に分けて樹立されました。１９８４年には１０００万人、１９９０年には１２００万人を目標人口としています。

（図 35）

また、１９８８年のソウルオリンピックはソウルを変える大きなきっかけとなりました。

（図 36）

そのころのソウルのメイン事業は地下鉄建設だと思います。公共交通問題を解決するために８つの路線を整備しました。今は約７００万人以上が利用する市民の足になっています。

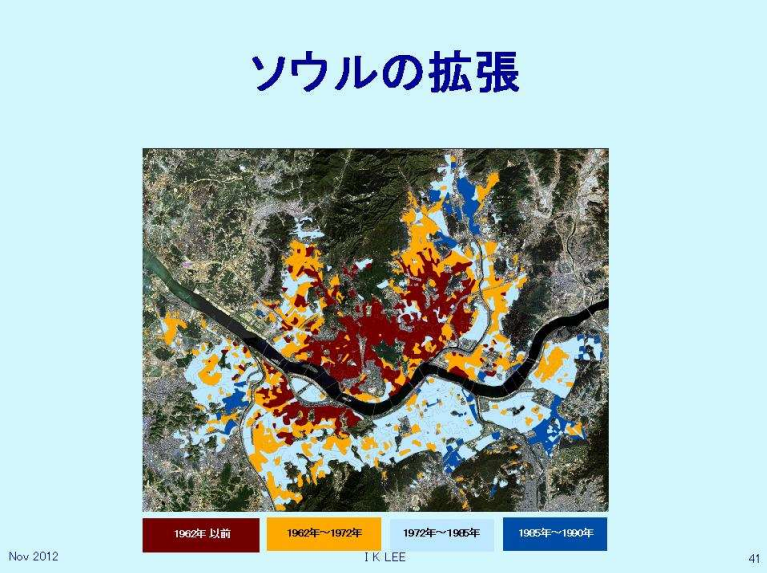
（図 37）

都心地再開発が行われるようになりました。

（図 38）

深刻な住宅難を解消するために宅地開発と住宅地再開発を行いました。左側の写真のように、低密度の宅地が、右側のように高密度の宅地に変わりました。とんでもない建築のラッシュになっていったと思います。右側の写真のように景観を全く考えないアパート―団地をつくることになりました。この時期は住宅難を解消するために容積率を４００％まで認めました。

（図 39）



この写真は、時代によってソウルはどういうふうに拡張されたのかを見せる写真です。赤くなっているのは１９６０年までの市内の様子です。それが時代によって外側に広くなって、ソウルは拡張され続けたということです。

（図 40）

開発時代の最後はすごく悲劇的なことが起こりました。ハードウエアの面では、聖水大橋と三豊デパートの崩壊事故がありました。１９７９年に建設された聖水大橋は１９９４年、１５年後に壊れまして、ここで３０人以上の人が死にました。三豊デパートは１９８０年代後半につくられたものの１９９５年に崩壊しました。５００人以上が死んでしまいました。本当に悲劇的なことでした。ソフトウエアの面でも大きな問題がありました。１９９７年に国が破産しました。３５年にわたるこの開発時代はこのような大きな教訓を残して次の世代へと移っていくことになりました。

（図 41）

１９９５年以降はソウルの人口は安定してきました。所得の面では中進国まで成長した時期ではなかったかと思います。そのころにちょうど民間の大統領が生まれるようになりました。

（図 42）

このころ所得は２万５０００ドルになり、車は３００万台まで増えることになりました。また、爆発的な都市化の副作用を治癒する時期になっています。昔の開発時代のソウルは過密で交通混雑、環境汚染などのイメージがありました。物量、効率、成長至上主義が市民たちのイメージの中にありました。

（図 43）

開発時代が終わった１９９５年からの時代を整頓の時代と呼びたいと思います。この時代は、経済的な富裕による新しい価値を追求する時期でもありました。このころからは自然、歴史、地形の回復、また生活の質を求めて、人間中心の持続可能な都市になることを目指しました。

１９９５年からはソウル市民の１人１人がソウル市長を選ぶことができるようになりました。その時代は市政の安定性が求められ、市民の世論を積極的に収れんする時期でもありました。

１９９５年からは開発時代の副作用を治癒するいろいろな政策が出されました。歴史と自然を復元し、緑地空間を拡張する政策が生まれました。公共交通手段を拡充して、ニュータウン事業を本格的に開発する時期であり、都市管理がハードウエアからソフトウエアに移動される時期でもありました。都市のデザイン、魅力、都市競争力などが大きなテーマになりました。

（図 44）

この写真は南山にあった外国人のためのマンションの様子です。１９９４年になりますが、ソウルに都をつくってから６００年を記念してこのアパートを壊すことになりました。昔の地形を回復して、その南山を市民たちに返すということです。

（図 45）

また、景福宮という宮殿の前にあった朝鮮総督府を壊すことになります。

（図 46）

また、大規模な公園が造成される時期でもありました。今まで４人の民選の市長を迎えました。この写真は、１人目の民選市長がつくった大きな公園です。右側の写真は、２人目の民選市長がつくった公園です。これは９８メートルぐらいの大きな山です。この山は開発時代にごみを捨てたごみ処理場の上につくられた山です。これを公園にしました。

（図 47）

３人目の民選市長だった今の韓国の李明博大統領は、このような公園をつくりました。右側の写真はこの前やめられた呉世勲市長がつくった公園です。開発時代だと、この場所にこのような公園ではなく、限りなくマンション開発をしていたと思います。

（図 48）

この時代に、光化門交差点に横断歩道をつくりました。１９６７年に地下歩道をつくって、その入り口が交差点にありました。ソウルに５万台の車があった時代です。車のために人は地下にもぐらなければいけなかったんです。ここに２００５年、横断歩道をつくることになりました。５万台あった時代には人が車のために地下にもぐったのですが、３０

０万台を超えた２０００年代に入って、上に横断歩道をつくったということです。そんなに大したことではないと思われるかもしれませんが、これはソウル市にとって大きな一歩を踏み出したことでした。

（図 49）

これは都市が、車が主体ではなく人間が主役になったということです。市民たちの手でこのような横断歩道をつくるまでに３７年かかったということですが、ここでとどまらなかったんです。もともと片道７車線ありますが、それを５車線に減らしました。この道路のど真ん中に広場をつくりました。このような痕跡はソウル市内のあちこちであります。

（図 50）

これは市役所前の昔の様子です。車が主役になっている写真です。市役所前に大きな広場をつくるようになりました。車のかわりに市民たちが遊べる空間ができました。

（図 51）

開発時代にはふたをしてしまった清渓川が復元されるようになりました。

（図 52）

これはソウルで普通に見られるバス中央車線です。右側に見える乗用車のほうは渋滞に巻き込まれても、バスだけはスイスイと通れます。公共交通手段を優先するという政策をソウルは普通に今行っております。

（図 53）

また、地下鉄は今もつくられています。この写真は３年前につくられた地下鉄９号線の様子です。

（図 54）

これは最近の住宅再開発の様子です。かなり高層化されるようになりましたが、昔と比べると、周辺の町とつながっているような形をとっていることがわかると思います。

（図 55）

最近のソウルの変化のトレンドについて説明したいと思います。トレンドといいますか、ソウル市の現状とこれからの挑戦と言わなければいけないと思います。

（図 56）

最初に言えるのは、人口減少と高齢化です。私は、ソウルの人口はこれから１０００万人を下回ってくるのではないかと思っています。それよりも深刻な問題は高齢化ということです。６５歳以上の人口は８０年代には２．５％でしたが、２０００年には５．４％、１１年になってからは１０％を超えるようになりました。２０２０年になりますと、１５％まで増えるのではないかと予想しています。平均年齢も高齢化します。１９８０年には２４．８歳だったのが、去年の場合は３８．７歳になりました。この間平均年齢が１４歳も増えたということです。

今まで韓国で行った政策の中で一番成功したのは家族計画です。家族計画というのは子どもを２人以上は産んではいけないという政策でした。その影響でソウル市はこのような問題に遭っているということです。２人以下の世帯が全体の５０％を超えるようになりました。また、世帯平均は８０年には４．５人から、２．４４人になっています。これからは部屋の大きさが小さいマンションが主流になってくるのではないか。このような問題については統計を分析しなければいけないのではないないかと思っています。

（図 57）

次は、川の南側と北側の格差が出てきたということです。川の南側の開発は成功しましたが、北側が老朽化しています。南側と北側の発展のスピードが違ったということで、北側のほうが井までには違和感を覚えることになりました。

（図 58）

次は、景観と歴史文化資源の毀損についてお話したいと思います。ソウルでは歴史文化資源の消失の危機に立たされました。また、丘陵地周辺の大規模な開発が許可されることになって、自然環境が毀損されるおそれが出てきました。住宅問題を解決するためにマンションを建てるようになったんですけど、そのマンションのおかげで戸建て住宅がなくなってきています。超高層マンションの問題がこの都市には大きな問題の１つになるのでは

ないかということです。

（図 59）

また、再開発、再計画のために庶民の住宅が減少していることが大きな問題です。この整備事業で庶民住宅の在庫が大幅に減少しました。これは庶民たちの定住性に脅威となりえます。

（図 60）

次は、産業構造の変化です。ソウルの産業は、昔の製造業から今はサービス業が主体となり、大きな変化を見せています。また、ソウル市の経済成長率がほかの都市に比べると低いということが言えると思います。ソウルが全国をリードできない。これは首都圏を規制したということで問題になっているのではないかと思います。

（図 61）

次は、気候変化に対応するということです。政府の政策をソウル市が先導しなければいけないという立場があります。2005 年に京都議定書の発効があり、ソウル市も先進国と足並みを合わせて地球温暖化解消のために頑張らなければいけないと思っているわけです。

（図 62）

今までの５０年間を振り返りながら、未来のソウルをイメージして、２０３０年を目標とした都市基本計画をつくりました。今説明するのは去年の末までに確定したソウル市の基本計画でございます。去年の暮れに補欠選挙でソウル市の市長が新しい市長になりました。ソウル市の市長の政策の方向は保守から革新になったということが言えると思います。大きな変化が今進行中でございます。今説明する都市基本計画も少し修正があるのではないかなと思います。

（図 63）

ソウル市の基本計画は未来の価値を提示して、また骨格を形成を先導する形になります。１９９０年、９７年、２００５年に分けて新しい目標を定めてきました。９０年代までは快適で健康な都市をつくりましょうということを掲げました。２００５年には治癒と回復を大きなテーマとして挙げています。

（図 64）

未来のソウルは、世界的なグローバルトレンドに合わせていかなければいけないと思います。経済成長の鈍化とともに高齢化、１人世帯の増加にも対応できる都市でなければな

らないと思っています。歴史・自然・人間というソウルの強みとポテンシャルを最大に生かしながら、未来の様子を定めました。これからのソウルの様子は、一言で言うと、暮らしやすいグローバルグリーンソウルということです。

（図 65）

この前、ソウル市民の意見を収れんしました。環境親和的な都市、競争力のある都市を市民たちは求めました。ソウルの発展方向としては、生活の質を改善してくださいという意見が多かった。

（図 66）

この課題を解決するために４つの課題をつくりました。競争力のあるグローバルソウル、魅力的な歴史文化ソウル、ともに生きる幸せなソウル、親環境グリーンソウルということです。

（図 67）

空間構造計画
1都心-5副都心-11地域中心
広域化に対応した多核分散型空間構造
1都心を中心に5代生活圏別中心地(副都心)均等配分
"生活圏別均衡発展を目指す"
서북 생활권
동북 생활권
서남 생활권
동남 생활권
도심
영등포
상암 중심
성북 부심
강남
용산
영등
상계
미아
원산
춘천
원주
대전
군산
인천
영종도
송도 신도시
김포
목동
안양천
대림
신촌
공덕
청계천
한강
잠실
문정
수원
상암
상계
상암 중심
성북 부심
영등포
영등
용산
도심
상계
미아
원산
춘천
원주
대전
군산
수원
인천
영종도
송도 신도시
김포
목동
안양천
대림
신촌
공덕
청계천
한강
잠실
문정

赤い線で入っている周辺都市圏とお互いに協力できるような形になっております。

（図 70）

２つ目は地域特化育成による広域発展軸の多変化。ソウル市には周辺とつながる５つの大きな地区があります。ソウルとインチョンをつなぐ軸。ソウルとインチョンの経済中心地を連携したグローバルビジネス機能を拡充します。また、東側とつながる東北軸は、東側には大学がたくさんありますので、産学が連携した首都圏の東北部の雇用基盤を強化するということです。西側には今ソウル市が計画しているデジタルメディア都市というのがありますが、それと連携したデジタル創造文化クラスターをつくる。西南軸についてはＲ＆Ｄと生産を連携する先端産業ベルトをつくります。東南方向については、グローバル知識サービス機能を拡充します。

（図 71）

次は、駅前中心の土地利用を強化します。地下鉄駅が３６０個ぐらいあります。その駅前の開発で高密、複合させ、外側をあけるということです。また、生活に便利な施設を集めて生活駅勢圏を形成します。

（図 72）

ソウル大都市圏の統合的な交通インフラの拡充です。３つの核を首都圏の機能と連携させます。特に空港と港湾を連携させることを目指したいと思っております。各拠点と外側の背後地域とつなげるような公共交通手段をつくるということです。

（図 73）

このような政策を実現するためにつくっている大きなソウルのプロジェクトを紹介したいと思います。

これ以外にもソウルにはたくさんのプロジェクトがありますが、中でも川の北側のプロジェクトを幾つかを紹介したいと思います。この一部にはソウルの新しい市長が再検討に入っているものもあります。今韓国にも少しあらわれている経済危機で、余り進んでないプロジェクトがあるのも事実です。

でも、これはいつかは実現させなければいけないことだと思いますし、時期の問題だと思っております。

（図 74）

最初は都心を再創造するプロジェクトです。ソウルは昔から東西方向の軸が強く発展し

ている都市です。この道路は鐘路（ジョンロ）という道路です。これは朝鮮時代からビジネス街として使われています。これまで川の北側と南側の開発のスピードの差があり、今大きな問題になっていますので、北と南の軸を開発して、それによって地域均衡発展を目指す。南北方向に４つの軸をつくって都市を活性化させるつもりです。

（図 75）

そのためにつくられたのが先ほど説明しました光化門広場です。

（図 76）

また、都心地にある城郭も復元させるつもりです。全体が１８キロの中、今１１キロまで復元されました。上の写真が昔の写真で、そのような形で復元されたところを市民たちが歩けるという写真です。

（図 77）

宮殿の復元も今頑張っております。

（図 78）

韓屋（ハンオク）という韓国の昔の住まいを保存していくことも今考えております。昔は３０００戸ぐらいの韓屋が残っているという資料がありましたが、１０００戸ぐらいがなくなってしまったのが、今の状況でございます。今は政府が、これを改修するときにはお金の支援をするなど、韓屋を残す方向でいろいろな努力をしているわけです。昔の様子が今もソウル市内に残っていて、その町に行くと昔のにおいがするようにしたいと思っています。

（図 79）

東大門の周辺にできているデザインプラザです。上の写真が前にあったサッカー場と野球場の様子ですが､それをなくして市民のための公園をつくるという作業をしております。これはザハ・ハディドの作品でございます。このような努力で東大門地域をデザインのハブにしたいと思っております。

（図 80）

また、都心地に緑の軸をつくりたいと思っております。城郭を復元させることで、楕円の形の緑の軸ができるようになります。北側にある山と宗廟を結び、南の南山までつながる緑の軸をつくろうとしております。

（図 81）

次は、漢江ルネサンス事業について説明したいと思います。昔の漢江というのはソウルの南の端でした。今、漢江はソウルの中心になってしまいました。漢江が新しい役割を果たさなければいけないということです。

漢江に２つの大きな目標を与えました。１つは回復です。人・水・自然の毀損された関係を取り戻して、東西南北の疎通の回復しなければいけないということです。自然を復元して、東西南北疎通の場所として、船便もできるようになると思います。

また、回復とともに創造という役割を果たしてもらいたいと思っています。漢江が持っている可能性とその価値を発掘して新しいブランドをつくりたいと思っています。

（図 82）

漢江中心の新しい都市空間を再編したいと思っています。真ん中に中心があり、西側と東側に分けて３つの地域として考えております。

（図 83）

また、漢江の生態系を回復させるということを目標としています。これは汝矣島にある小川の生態湿地を造成する事業です。漢江にあった川沿いの護岸は自然型に戻して造成させないといけないと思っています。漢江に入る小川も整備して新しい生態系をつくりたいと思っています。

（図 84）

今までは北側には、北朝鮮のせいで通ることのできない船の道がありましたが、インチョンにつながる運河をつくって、そこから西の海岸に直接行けるようなことをイメージしています。また、南北が統一されたり、南北の関係がよくなったら、北側の北朝鮮を通る道も使えるのではないかなと思います。

（図 85）

水辺の公園もたくさん造成されました。漢江は幅が１キロもある大きな川です。

（図 86）

人工島をつくって市民たちが使えるようなところを造成しています。

（図 87）

川沿いの景観を改善するための努力をしております。単調に見える漢江川沿いの景観を改善するために制度も整備しますし、施設物の景観も改善させております。

（図 88）

新しい副都心として期待されている龍山の新都心プロジェクトについて説明したいと思います。龍山というのは今米軍の駐屯地として使っているところです。緑に見えるところが米軍が今暮らしているところです。ここは日本の植民地時代にも日本軍が駐屯した場所です。龍山にはこのように鉄道の場所として使われているところがあります。このような地域を新しい都心として変化させるプロジェクトを今行っております。下に項目が述べられておりますが、このように多くのプロジェクトが進んでおります。

（図 89）

ソウル駅の北に、国際会議施設をつくります。ソウル駅には貨物を扱っているところがあります。そこの活用が余りされてないということで、多機能の複合空間をつくろうということが進められております。こうしますと、川の北側にも大きなコンベンション施設ができまして、川の北側と南側の均衡発展がとれると期待しています。

（図 90）

南山の生態性を回復して､接近性を改善するというプロジェクトが進められております。先ほど説明しましたとおり、外国人のためのマンションを壊して南山の昔の様子に戻すという作業をしております。南山の昔の形を復元させることに今頑張っています。

（図 91）

龍山の米軍の駐屯地を公園として造成するという仕事をしております。最近、国際コンペを行いましたが、そこで当選したのは、Healing-The Future Park というタイトルの作品でした。今の米軍は南１００キロ下の平沢（ピョンテク）という町に移されることになります。これができるとニューヨークのセントラルパーク以上の大きなカッコいい公園ができるのではないかなと思っております。このように米軍が返還する土地をすべて公園と

して使うというような法律が定められています。

（図 92）

次は、龍山国際業務地区です。前に鉄道の工作廠として使われた敷地を新しい国際業務地区として造成する計画です。これは川沿いの住宅地まで含めますと、５６万平米以上の大きな開発になります。川沿いに走っている高速道路を地下化してウォーターフロントタウンをつくります。

（図 93）

漢江芸術島を造成するという仕事です。漢江の真ん中に残っている島を利用して、そこを文化ソウルを代表するランドマークとします。ここにはオペラハウスとコンサートホールが入ることになります。

（図 94）

龍山国際業務地区と芸術島が入っている大きな鳥瞰図でございます。

（図 95）

１時間２０分にわたって、ここまで説明した内容をまとめたいと思います。

ソウルは朝鮮半島の中心都市から世界的な都市として今は発展し続けております。

もともと風水に基づいた都市として計画されたものの、植民地時代、戦争、また都市開発の過程によって原型が大きく毀損されているということが言えると思います。

特に１９６０年から１９９５年は爆発的な膨張、開発時期であり、その後遺症として、過密、混雑、環境汚染、成長至上主義があったと言えると思います。

しかし、１９９５年以降は整頓の時期に突入しました。自然環境の回復、持続可能性に重点を置いた生活の質を求める時代になったと思います。

今のソウルは、高齢化、地域不均衡、住居不安、産業構造の変化、気候変化への対応が課題です。

また、ソウル管理政策の方向を、暮らしやすいグローバルグリーンソウルということに決めて、その中で競争力のあるグローバル都市をつくること、魅力的な歴史文化都市をつくること、バランスよく発展できるような都市をつくること、親環境グリーン都市をつくることに重点を置いております。

（図 96）

この講演を終わる前に、何人かの方に感謝の気持ちを伝えたいと思います。日建設計の安副社長に、このような席をつくっていただいたことに感謝の気持ちを伝えたいと思います。ここまで準備をしていただきました谷さんにも感謝したいと思います。また、韓国語でつくられた原稿をここまで日本語に変えてくれました日建設計のソウル支店にも感謝したいと思います。ここまで通訳したイさんにも感謝の気持ちを伝えます。

以上でございます。（拍手）

李　　仁　根　氏

フリーディスカッション

谷　大変わかりやすいお話を聞かせていただいてありがとうございました。

それでは、皆様のほうから先生に何かご質問のある方、どうぞお手をお挙げください。

土堤内（㈱ニッセイ基礎研究所）　今日はどうもありがとうございました。２つお尋ねしたいことがあります。

１つは、清渓川の高架道路の撤去の件です。撤去することによって、本来あった交通需要はどのようにその後処理されたのかということです。

もう１つの質問は、今日の話の中にも出てきましたように、東大門のデザインプラザ等々、今のソウルの開発は文化政策と非常に深く結びついているように思うのですが、そのあたり行政の組織としてはどんな仕組みで都市政策と文化政策を結びつけていらっしゃるのか、その辺を教えていただきたいと思います。

李　質問ありがとうございます。まず、清渓川の高架道路について説明したいと思います。清渓川の高架道路はソウルの外郭と中心部を結ぶ大きな役割をしていた道路です。地下１階と地上を含めますと、１０車線もあった大きな道路でした。１日通行量は１７万台にまで上りました。今おっしゃったとおりに、その道路がなくなると大きな交通難になるとみんなが言っておりました。そのような心配の声がありましたが、ソウル市の交通を画期的に変える１つの種になったと言えると思います。まず、政策の方向として、ソウル市内、都心の中では車を運転するのはすごく困難だよということを認識させることが大事だったと思います。幸い、この工事に入るときはソウルの地下鉄環境がすべて整った時期でもありました。８つの路線が完成したのが２０００年でした。２００２年に清渓川の開発の計画を立てました。撤去を始めたのが２００３年の７月でした。そのような努力で、撤去は大きな問題なく進められました。復元された直後に比べますと、ソウル都心部の交通は大分改善されていると言えると思います。

次は、デザインプラザについて説明したいと思います。文化政策と都市政策はどういうふうに結ばれるかということについての質問だったと理解しています。

都市の管理政策がハードウエアからソフトウエアに変えられたということです。文化施設というのは、ソウル市民たちに休憩する場所を提供するという意味があると思います。ソウル市はそこよりももう一歩進んだ政策をつくりたいと思いました。また、文化という

のは都市の競争力を上げる何よりも大きな役割をしていると思います。文化施設が人を呼び、その場所を都市が提供して都市の競争力を上げていくことが政策として考えられました。それを英語でカルチャーノミックスと言いたいと思います。

谷　質問はまだお受けしますが、私どもの安のほうから、先生のご紹介と今日の講演会を開きました経緯について少しお話をさせていただきます。

安（㈱日建設計副社長）　李博士、どうもありがとうございました。今日の講演会の企画に携わった立場から一言。特に先ほど来、先生はご自分のことをほとんどおっしゃっていないので、その辺のことも合わせてご紹介させていただきたいと思います。

実は３年ぐらい前だと思いますが、先生を一度お招きしてお話をしていただいたことがあります。そのときはまだ現役のソウル市の都市計画の最高責任者でいらっしゃいました。もっともっと大きな講演会だったと思います。そのときのお話も非常に感銘を受けましたが、今多少ご自由な立場にいらっしゃいますので、今日また改めてお話を最初から伺っていて、ソウル市の都市政策を歴史的に通観する、総合的に、客観的にご覧になっている、その物の見方は大変参考になったわけです。李先生の仕事ぶりを以前からずっと注目しておりました。

一番最初の出会いについてご説明します。今日見事な通訳をやっております日建設計の社員のイ・ジへがソウルで仕事をしている折に、仕事も軌道に乗ってきたし、そろそろ支社を開設したいと考えました。いろいろとご支援していただける方を現地で探しておりましたところ、ある方のご紹介で、今はかわりましたが、当時のソウル市長の呉世勲市長に面会がかなう、しかも、そこで我々がどういう仕事をしているのか、どういうことができるのかというプレゼテーションもできるというまたとない機会を得ました。会議室に入ってびっくりしましたが、市長が、各局長をズラッと並べて現役の局長にも話を聞かせてほしいということでした。その中に李仁根博士もいらしたわけです。

大した話ができたわけではないんですが、我々がどんなことをやっているかということと、ソウル市という町を都市計画、建築の立場からどういうふうに見ているかという意見を率直に申し上げるという大変貴重な機会でした。

その後、博士のほうから、また個別に話をしないかということで機会をちょうだいしたのがおつき合いの始まりで、これで５年半のおつき合いということになるわけです。

１９９５年から整頓の時代に入ったということを先ほどのプレゼンテーションの中でお

っしゃっていましたが、この整頓の時代は、今の李明博大統領がソウル市長として切り開いて、その片腕として李仁根博士がずっと切り開いてこられた。李博士はその後、呉世勲市長と、２人の市長にお仕えになった。整頓の時代、ソウルのリノベーション、清渓川、光化門広場のプロジェクトは博士のお力がなかったらできていない偉大な事業だと思います。

日本の都市計画にも大変興味を持っていただきまして、いろいろと意見交換させていただきました。先ほど申し上げましたように、特別講演もやっていただきました。やはりソウルから東京を見て、東京の都市計画はどうなっているんだろうというのは当然興味があるとのことで、東京で誰かと話をしたいなという投げかけをいただきました。それはいいと思いました。当局者のトップ同士が都市政策についてのお話を闘わせていただくのはいいことだと思って、私もいろいろ考えました。

これは比較的最近、シンガポールでも同じことが起きまして、シンガポールの都市再開発局のＣＥＯの方と話をしていて非常に強く感じたことです。行政の当局者の方が一人称で専門家としてお話しになる。日本では、無責任だとか能力がないとかいうつもりは全くないんですが、リーダーとなる当局の方がその方の名前で顔を出して国際的に情報をやりとりするという場面になかなか出ていかない。今回のシンガポールのことで強く思っていました。

李博士と対面してどなたがお話しするんだろうというのは、そのときは本当を言うとちょっと苦労いたしました。結局当時の東京都の只腰技監に会っていただいて、それで非常に有意義な人間関係ができたと思います。日本以外の国ではそういう行政の場面でリーダーシップを持ってやっていらっしゃる専門家が目立つなと私の目からは思います。どっちがいいのかわかりませんが、これから都市が個性化の時代ということであるならば、そういう専門家のキャラクターで引っ張っていくことがあってもいいのかなと、生意気にも思っている次第で、行政の方がこちらにいらっしゃったら、勘弁してください。

２０３０年戦略ということで今日はすばらしいビジョナリーなプロジェクトのご紹介をいただきました。よく考えてみると、東京も東京以外の日本の大都市も持っている課題の共通性が非常に高いと思います。韓国ほど民間に比べて行政の力が卓越していない。少し事情が違うという面があると思いますが、２０３０年に向けてソウルがお考えになっていることは、大変参考になるのではないかなと聞いておりました。

一方、これからの政治情勢などいろいろなことで、日本はひょっとしたら進んでいるといいますか、政治的な混迷度がより深くなっているということも言えるかもしれません。日本のほうが経験をしているという面もあるかもしれませんので、そういう意味でも、博士のようなお立場で、これから行政に戻られるおつもりがあるかどうかまだお聞きしておりませんが、韓国と日本の都市政策の意見交換をもっと深めながら進めていく上で大変貴重なお人だと思っております。今後ともどうぞよろしくご指導のほどをお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

谷　それでは、引き続き、先生にご質問のある方がいらっしゃれば。

新井（日本大学理工学部客員教授）　もともと行政におりまして、個人名で話をするのはけしからんという話はそのとおりだと思いました。今日はいい話を久しぶりに聞かせていただきました。ソウルの持っているエネルギーというんでしょうか、強さ、その方向を教えてもらいまして、本当にありがとうございました。

質問は、ソウルは風水に基づいて立地したということを、そうなのかと思ってお聞きしました。そして２０３０年を目指して新しい計画の説明を伺いました。これも一番初めにおっしゃった風水とつながっているのか、だとしたら風水というのはどういうことなのか、もう少し教えていただければなと思います。

李　質問、ありがとうございます。朝鮮の開国の時代につくられた風水を今も守ることは無理があると思います。しかし、今、都市計画という名前でソウルを変えていくには風水は外すことはできないと思っています。風水という名前では呼べないかもしれませんが、自然とうまくつき合えるような都市をつくるということが、今の時代の風水ではないか。開発時代には短い時間にたくさんのインフラをつくらなければいけないということで、破壊してもしようがないという認識もあったと思います。今は開発のスピードを遅くして、周辺を見れるような余裕ができて、そのようなことを考える時期になった。開発時代にたくさんやってきた開発は、風水の面では逆に困難な時代だったのではないかなと思うんです。それに比べますと、１つのルールをつくって自然とつき合うという形をつくったのは今の時代の新しい風水のとり方だと認識しています。

谷　ほかにどなたかいらっしゃいますか。しばらく先生がいてくださると思いますので、それでは、これで講演会は終了させていただきます。先生に盛大な拍手をお送りください。

（拍手）　以上をもちまして本日のフォーラムを終了させていただきます。（了）